



内田 雅史さん

- 出身：南部町寺内
- 職業：農事組合法人 寺内農場 作業課長
- 好きな食べ物：肉
- 趣味：スキー

稲穂をつけた田んぼの稲刈りが始まり多忙な時期。

その貴重な時間を頂いて取材に応じて下さったのは南部町の農事組合法人寺内農場の作業課長を務める内田雅史さん。

寺内農場は現在、およそ 42 ヘクタールの土地で米を中心に大豆・そばも栽培している。

従業員は正社員 3 名、繁忙期にはパートを雇用する。

農場の作業計画から事務作業、従業員への指示などを統括する立場にある内田さんは、幼い頃から祖父母や親の農業を身近に感じ「将来は地元で農家になる」と夢見てきた農業少年だった。

初めてトラクターに乗ったのは内田さんがまだ保育園児の時。

祖父の知り合いに乗せてもらったそう。

小学生の頃から休み時間は友達と校庭で遊ばず校長先生と一緒にトラクターに乗り、繁忙期には終礼がなるが早いか学校を後にして田んぼに行く。

地元の中学校を卒業した後は、鳥取県立倉吉農業高等学校、鳥取県立農業大学校を卒業し“農業への道”を着実に進んでいった。



そうした、内田さんの農業への夢をずっとそばで見てきた地元の人たちは、高齢化の進む将来を見据え、若い担い手の雇用体制を作るため、平成 14 年に農事組合法人を設立した。

内田さんは大学校を卒業後すぐに法人に勤め始め、現在に至る。

農業を目指すようになったきっかけは、農機がかっこよかったからと話すほど、無類の農機好き。



特に海外製の農機は馬力も本体の大きさも凄まじいらしく、毎年北海道で開かれる農機の展示会に行くそう。

金額も大きさも莫大な農機はもちろん簡単に購入というわけにはいかないが、100 台近い農機のミニモデルが家にあるのではないかと話す内田さん。

今一番憧れている農機は《Fendt 1050 Vario》。

そのカタログとミニモデルを見せて下さった。

農機好きな内田さんだが、もちろん機械に乗ったりメンテナンスをしたりするだけが仕事ではない。

作業計画を立て日々作業に勤しみ事務作業もこなす傍、地域の集まりごとに出たり、地域住民や同業者との交流も欠かせない。

農家にとっては当たり前かもしれないが、中学生以降ゴールデンウィークがあった記憶はなく、近年で言うシルバーウィークなどももちろん無い。下手をすれば請け負っている除雪作業で年末年始がない年もある。

日々追われる中でも今後の寺内農場の方向性や、新しいことを取り入れることなども考えていかなければいけない。高齢化する社会と変化する時代の中で、常に農業の形に向き合い模索し続ける。

南部町のどういうところが好きかと伺うと、「自分は県外に出たり町外で働いたりしたことが無いので、景色も環境もずっとそこにあるものだけど、人が色々と“ごしてくれる”ところはいいところだと思う。」と話す内田さん。※ごしてくれる=くれる



近所の方が野菜をくれたり、困っていることがあったら助けてくれる。人の温かさは住んでいるからこそ気づくことなのかもしれない。

“小さい頃から地域の人たちが先生だった”と話す内田さん。

機械の先生は田住の吉持さん、農機の修理は北方の足井さん、土木の知識は三崎の唯さんからというようにそれぞれの分野をその道の先輩である、地元の人から学んだ。

そこには地域の人からの期待と同時に、南部町ならではの人の温かさも大きいのではないかと思います。

だからこそ、内田さんのその言葉から、地域の人たちにここまで育ててもらったという感謝の気持ちと、その期待や役目を背負っているという責任感が感じられた。

人が人を育てる。地域の大人が子どもを育てる。

数年で驚くようなものが発明されたり、インターネットさえあればワンクリックで何でも調べられたりする時代の中で、人から人へ、大人から子どもへと言葉や経験として伝わっていくものこそが本来のコミュニティーの形であり、田舎だからこそ残る強みなのかもしれない。



渡邊舞 (わたなべまい) /大阪府出身
南部町地域おこし協力隊

～取材者の一言～

内田さんの話は、取材をお願いする前から地元の方々から伺っていました。

「小学生の頃からトラクター乗ったよ」「小さい時から自分は農家になるって言うよったけん」…その言葉の数々から、内田さんがどれだけ地域に愛されていて、期待されているかということが感じられました。

“自分が何になりたいか”を高校生やむしろ大学に入ってから考えることも少なくない中で、これだけ幼少期から同じ夢を持ち続けそれを叶えていて、またそれが叶うように力を尽くす地域の姿はとても素晴らしいと思いました。